

街路樹とは？

「街路樹」とは、市街の美観や環境保全のために道路に沿って列状に植えられた樹木のことです。ガードレールや街路灯、標識といった他の道路施設と異なり、街に潤いや安らぎを与えてくれます。



▲北3条西15丁目の街路樹

街路樹の始まり

札幌の街路樹は、明治四年、現在の北海道神宮裏参道沿いにアカマツを植えたのが最初とされています。

明治十八年には、中心部の道路に沿ってニセアカシア、ヤナギ、サクラが二間（二・三メートル）間隔で植えられ、その後の街路樹づくりのモデルとなりました。

この後、時代の流れや札幌

の発展とともに、その本数を

次第に増やし、高木・低木合わせて市内には約七十三万本の街路樹が、また、中央区には、約六万五千本の街路樹が植えられました（平成十七年四月一日現在）。

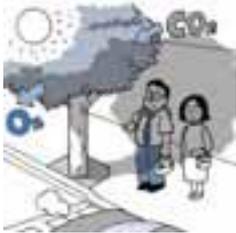
街路樹の役割

街路樹には、次の三つの大きな役割があります。
○美しい景観を創ります

春には花や新緑が、夏には色濃い緑が、秋には色鮮やかな紅葉などが、四季それぞれの季節感を醸し出し、人びとの目を楽しませてくれます。

○街の環境を良くします

夏の緑は強い日差しを遮って涼しい木陰をつくり、街をわたる風を和らげます。葉は二酸化炭素を吸収して、大気の浄化に役立つほか、防



音や防じんにも効果があります。

○交通安全を確保します

ドライバークライ線を柔らかく導き、対向車のヘッドライトのまぶしさを遮るなど、走りやすい安全な道路にします。また、ドライバークライの疲労軽減にも役立ちます。



街路樹の特徴

札幌市民百人当たりの街路樹（高木）は十二・六本であり、この数値は、政令指定都市の中でも上位にあたります。

また、植栽されている樹種をみると、イチヨウ、プラタナス、サクラという全国共通のものがあります。しかし、本州の各都市に多いケヤキ、ユリノキ、トウカエデ、クスノキなどは少なく、本州には見られないナナカマド、ニセアカシア、シラカバなどが主要な樹種となっており、北国札幌の特色がはつきりと現れています。

みどりのボリュームアップを図ります



▲幌西地区連合町内会の清水さん

幌西地区連合町内会は昭和52年から歩道のます花壇への花植えを行うなど、積極的に地域の緑化活動に取り組んでいます。

また、今年3月には、札幌市と環境美化のアダプト（※）プログラムの覚書を交わし、地域と行政が協働したみどりのまちづくりを目指しています。

新たな取り組みとして、札幌市から配布される種と土を利用して花苗づくりなどを行っています。

同町内会の環境部理事である清水良昭^{しみずよしあき}さんに、最近の活動の様子などをお伺いしました。

「毎年活動を重ねるにつれて、楽しみながら参加する人が増えてきました。今年からは、植える花をもっと増やそうと、種から花苗を育てるといった新しい取り組みを行っています。」

将来は子どもたちにも参加してもらい、地域に住むより多くの人の手で、街を花で美しく飾りたい」と優しいまなざしで語ってくれました。



▲歩道ます花壇での花植えの様子

※アダプトは英語で「養子にする」という意味で、道路などの公共スペースを養子に立て、地域団体などが里親になって、ごみの清掃などを行い、行政が支援する制度。